様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 5 月 26 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2008～2010
課題番号：２０７２０２０５
研究課題名（和文）　中国北朝の諸民族と文化の融合に関する考古学的研究

研究課題名（英文）　An Archaeological Study on the Cultural Fusion of Ethnic Groups in the Northern Dynasties of China

研究代表者
向井　佑介（MUKAI YUSUKE）
京都大学・人文科学研究所・助教
研究者番号：５０４５２２９８

研究成果の概要（和文）：本研究は、北魏王朝の支配層であった拓跋鮮卑が中国的変容（漢化）をとげていく過程を、考古学の方法により究明しようとしたものである。北魏の都城と陵墓にかかわる遺構・遺物の集成と分析を進めた結果、５世紀後葉において鮮卑の漢化が急速に進展し、それがのちに隋唐代の文化を形成する基盤をなしていることが明確になった。

研究成果の概要（英文）：The Purpose of this study is to reveal the Sinification process of Tuoba Xianbei which was the ruling class of the Northern Wei Dynasty in China, with the archaeological methods. As a result of investigation and analyses for the archaeological remains and artifacts from the walled cities and tombs of the Northern Wei Dynasty, it has became clear that the Sinification of Xianbei proceeded rapidly in the late 5th century, and these changes had a great influence on the culture later in the Sui and Tang dynasties.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	800,000 円	240,000 円	1,040,000 円
２００９年度	600,000 円	180,000 円	780,000 円
２０１０年度	600,000 円	180,000 円	780,000 円
年度			
年度			
総　計	2,000,000 円	600,000 円	2,600,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・考古学
キーワード：北魏、拓跋鮮卑、漢化、平城、洛陽、都城、瓦、陵墓

１．研究開始当初の背景

魏晋南北朝という時代は、秦漢帝国と隋唐帝国の間にあって、国家が分裂し、諸民族が移動を繰り広げた動乱の時期であったが、当該期の政治的・社会的・宗教的変化は隋唐以降の中国を形成する基盤となった。とりわけ北魏孝文帝のころに成立した制度や文化が、東魏・北斉をへて隋唐代に大きな影響を与えたことは注意される。孝文帝が推進し、後代に多大な影響を残した「漢化政策」とは、鮮卑を支配層とする北魏王朝の中国化をめざしたものであった。したがって、鮮卑をはじめとする胡族が中国的変容をとげていく過程を追究し、またその結果として成立した制度や文化の実態を解明することは、北魏王朝史のみの問題でなく、隋唐王朝の成立過程をさぐる重要な課題であるといえよう。

こうした問題について、現在までに文献史学による一定の研究成果が蓄積されてきた。しかし、漢化という現象は、爵制・軍制といった制度面から、儀礼・言語・習俗など多方面におよんでおり、そのすべてを明らかにするためには、文献に立脚した研究のみでは不充分である。北魏の正史である魏收の『魏書』は、鮮卑語を漢語に置きかえ、胡風をうかがわせる記述を排除しているし、南朝側の史料である『南斉書』魏虜伝は、胡族を貶める風潮がつよいため、その記載をすべて信用することはできない。北魏代において習俗や観念がどのように変化したのかを究明するためには、文献史料だけでなく、当時の人びとがのこした物質資料・図像資料に立脚して議論する必要がある。

しかし、これら物質資料・図像資料については、習俗や観念をさぐるうえで有効だと考えられるにもかかわらず、ごく一部の資料を除いて十分に活用されてこなかった。その原因のひとつは、当該分野の考古学がまだ発展途上にあり、遺物や遺跡の編年といった基礎的な検討さえ十分になされていなかったことにある。しかし近年の中国では、発掘調査の急速な進展にともなって、当該期の都城や寺院、墓制に対する研究が進み、多くの歴史的事実が明らかにされた。これにより、限られた文献史料から組みたてられてきた従来の研究に対して、具体的なモノに立脚した新しい歴史像を提示することが可能となったのである。

2．研究の目的

本研究の目的は、隋唐時代の制度や文化が成立する過程において、中国の周辺諸民族が果たした役割の重要性に着目し、北朝の諸民族が中国文化を受容し、新たな文化を生成していく過程を、歴史考古学の手法により解明しようとするものである。

従来、文献史学の立場から議論されてきたように、鮮卑をはじめとする胡族の「漢化」という現象が中国史においていかなる意味をもつものであったのか、という問いに対する答えを、考古学の立場から提示する必要があると考える。

北魏文化の変遷は、ひとつの側面において、拓跋鮮卑が中国文化を受容していく過程をあらわしていることはまちがいない。しかし、北魏という王朝が中国史において果たした役割を考えるとき、漢化と呼ばれる現象を、原始的な習俗をもつ胡族が中国文化によって教化されたという図式のみから理解することはできない。そこには、中国の文化や制度をふまえて、より新しいものを創出しようとした形跡がみとめられる。

そのような問題意識から、鮮卑の漢化とよばれる現象が、いかなる過程をへて達成され、その結果として成立した文化や制度がいかなるものであったのか、そしてその文化や制度がのちの時代にいかなる影響をあたえたのかを究明しようとした。

3．研究の方法

北魏の陵墓と都城を主要な分析の対象とした。墓制は当時の人びとの習俗や観念をさぐる有効な材料であり、また拓跋鮮卑が北魏を建国する以前から隋唐代までを通時的に分析するだけの資料的蓄積があることから、これを分析対象としてとりあげた。また、拓跋鮮卑をふくむ胡族は、もともと大規模な皇帝陵や都城を築くことはなく、それらを造営すること自体が中国文化の受容を意味している。皇帝権力が関与したこれらの国家的建造物を分析することにより、北魏王朝が中国文化をどのように受容していったのか、また胡族が統治階級となることによって中国文化はどのように変化したのか、といった問題を明らかにしようとした。

（1）北魏陵墓の研究

北魏が都とした平城（山西省大同市）の南郊や東郊では、近年の発掘調査により多数の北魏墓が発見されている。現地の調査・研究機関によって報告された200基あまりの墓について、埋葬施設や副葬品などのデータを集成・整理することで、編年的枠組を整理し、被葬者の階層や出自について考察した。

これらの作業の前提となる墓の編年は、墓誌や題記を有する少数の紀年墓と、副葬土器の型式編年をもとに組みたてられている。その年代を検証するためには、既存の報告書に依拠するだけでは不十分であるため、大同市博物館が保管する出土資料を実査し、編年的枠組の再検討をおこなった。

こうして検証した土器の年代をもとに、墓の年代を再検討し、墓の構造がどのように変遷したのかを整理しようと試みた。また、特定の墓群に属する墓どうしの関係性を整理することにより、共同墓地や家族墓地に葬られた人びとの関係性を明らかにしようとした。さらに、墓群の立地や分布をよりひろい視野から検討することにより、北魏平城の都城範囲と墓群とがいかなる関係にあるのかを究明しようとした。

また、近年発見された北魏前期の壁画墓の図像を検討することにより、そこに反映された被葬者の生前の生活や死後の観念について、考古・美術の両面から解明しようとした。とくに死後の観念については、墓の構造や副

葬品の種類などからも分析することが可能であるため、当該期における墓制が、全体としてどのような他界観とかかわっているのかについても検討をおこなった。

北魏前期の墓制について研究を進める一方で、北魏洛陽城（河南省洛陽市）の西北に分布する北魏後期の陵墓群についても分析をおこなった。洛陽の北魏陵墓群は、孝文帝の漢化政策をへて完成した陵墓制度を反映したものである。その実態を理解するための基礎作業として、墓誌の出土情報と銘文内容、計測値などをあわせて集成・分析する作業をおこなった。それをもとに、墓の立地や配列、分布について再検討するとともに、墓室構造や墓誌形態に着目し、それらの規格性について検討した。

（2）北魏都城の研究

北魏前期の都であった平城は、詳細な平面構造がまだ充分に解明されていない。現在までの考古学的調査の成果と、文献の記録を総合することにより、都城の平面構造と造営過程を究明する作業を進めた。

平城の造営にかんする基礎資料としては北魏の正史である『魏書』のほか、南朝側の記録である『南斉書』魏虜伝にも若干の記載がある。また、平城の空間構造については、『水経注』が参考になる。それらの記録を集成して、記載内容を検討した。

北魏平城の遺跡は、明代の城壁や現代の市街地に埋もれて不明瞭な部分が少なくないが、戦前の日本人による調査成果と、近年の中国側の調査成果を再検討し、また自身の踏査成果もふまえて、都城の全体構造を明らかにしようとした。

1995 年には大同市の南郊で、北魏孝文帝が建設した礼制建築である明堂の遺跡が発見され、また 2003 年には大同市の操場城内で大規模な宮殿建築の基壇が検出されている。出土遺物の実査にもとづき、報告を再検討して、検出された遺構の性格や意義について考察をくわえた。

一方、北魏孝文帝が遷都した洛陽城については、先学の考証によって、その平面構造はおおむね明らかにされている。しかし、魏晋洛陽城の構造については、なお議論があって研究者ごとに理解が異なるため、北魏の前後で都城の構造がどのように変化したのか、完全には解明されていない。北魏洛陽城を都城史のなかに位置づけるためには、その前史を正しく理解する必要がある。

そこで、本研究では、中国側による考古学的調査の成果と、『三国志』『水経注』など関連する文献の記録を整理し、曹魏の時代における洛陽城の造営について分析をおこなった。その際、洛陽城の内外で出土する瓦に着目し、そのなかから曹魏の瓦を抽出することにより、当該期における都城造営の実態を明らかにしようとした。そして、その成果をふまえて、北魏の洛陽城造営がいかなる意味をもつものであるのかを考察した。

4．研究成果

北魏王朝の支配層である拓跋鮮卑の文化を考古学的に解明するため、北魏前期の都であった平城と孝文帝が遷都した北魏洛陽城を対象に、都城とその周辺に分布する墓の発掘データを集成し、関連する文献史料・出土文字資料の収集と整理をおこなった。その成果の概要は「北魏の考古資料と鮮卑の漢化」にまとめて公表した（雑誌論文⑤）。

（1）北魏陵墓の研究

平城一帯の北魏墓についての墓の構造や副葬品などにかかわる基礎データを収集・整理し、文献史料とあわせて考察した。その成果は「北魏平城時代における墓制の変容」のなかで詳しく述べた（雑誌論文④）。

まず、基礎作業として、近年報告された大同南郊墓群の土器編年を再検討し、それにもとづいて墓の編年を再構築した。平城周辺から出土した土器を年代の基準とし、それを内蒙古自治区など周辺の地域に敷衍することにより、地域をこえた統一的な墓の編年が可能となった。

その結果、北魏の墓制が、中国文化の受容にともない、次第に簡素な土洞墓から塼室墓へと変化していく様相がみてとれた。北魏では、その初期から簡単な塼室墓が用いられ、太武帝の時期には沙嶺壁画墓のように本格的な塼築の方形単室墓が登場するものの、それが本格的に普及するのは 5 世紀後葉の太和年間になってからである。

一方、同時期の墓でも、埋葬施設が同じであるとは限らない。小型墓の多い大同南郊墓群においては、5 世紀末まで竪穴土壙墓や土洞墓が多数を占め、塼室墓はわずか一基だけである。宋紹祖一族の墓地である雁北師院墓群では、塼室墓と土洞墓が同時期に共存し、妾や幼い子供らが簡素な土洞墓に葬られたと考えられた。墓の構造は、時期によって変化するだけでなく、被葬者の地位や財力によって異なることが明らかになった。

太和年間に塼室墓が急速に普及することと対応して、北魏の墓制にはさまざまな変化が生じることもわかった。北魏の初期に多かった西向きの墓が次第に減少し、南向きの墓に統一される。棺をおさめるだけの空間しかもたなかった竪穴土壙墓や梯形墓室の土洞墓にかわって方形墓室が普及し、墓室内の空

間は拡大した。北魏の初期には、死者にささげる飲食物と動物犠牲に、わずかな装身具やガラス器などが加わる程度であったが、五世紀後葉には俑や明器の副葬がはじまり、葬具としての石牀が出現して、墓室は死者の霊魂がとどまる空間へと変化する。このような墓制の変化は、墓に対する観念そのものが、この時期に大きく変容したことをものがたっている。

５世紀後葉におけるこうした墓制の変容をうけて、洛陽において陵墓制度が完成する。５世紀後葉の平城にみられた多様な形態の墓室は、洛陽の邙山陵墓群において統一され、墳丘や墓室の規模に秩序が反映されるようになる。また、平城において不明瞭であった墓域に対する規制が明確化し、邙山陵墓群では孝文帝の長陵を頂点に皇族や貴族の墓域がさだめられた。墓誌の形状や記載形式が規格化するのも、洛陽遷都後のことである。

（２）北魏都城の研究

北魏平城の造営過程について、考古資料と文献史料をもとに検討した（雑誌論文⑤）。大同市の操場城で発見された大型宮殿建築から出土した瓦を分析したところ、基壇下層の土坑や基壇の周囲から北魏初期の瓦が発見されていることから、この建物が造営される以前に、その附近に別の建物があったことが判明した。道武帝が平城において宮室を造営したことが『魏書』太祖紀に伝えられるが、その際には瓦葺きの建物も建てられたことがほぼ確実となった。

ただ、道武帝の時期までさかのぼる瓦当の出土例は少なく、大同市内でしばしば発見される「大代萬歳」「萬歳富貴」などの文字瓦当や半円形人面紋塼は、５世紀中葉を中心とした時期に用いられたものである。したがって、平城において宮室と都城が本格的に整備されるのは、『南斉書』魏虜伝のいうように、太武帝のときからであると判断された。

さらに、５世紀後葉の平城では、孝文帝が大規模な造営事業をおこなった。それによって、遊牧民族の特色を色濃く残した北魏の文化は、中原王朝にふさわしい格式をそなえたものに変貌したのである。宮城における太極殿の建設と、明堂をはじめとする礼制建築の造営は、その象徴というべきものであった。

洛陽遷都の直前に平城で建設された明堂の瓦は、それまでの文字瓦当ではなく、蓮華紋・獣面紋という仏教的な意匠を表現し、製作技術においても格段にすぐれたものがつくられ、生産を管理するために箆書きで工人名を記した。このような瓦の変化は、５世紀後葉における建築様式の変化を端的にあらわしたものといえるだろう。そして、平城において成立した新しい様式は、孝文帝が遷都した洛陽城において定着し、東魏・北斉鄴城をへて、隋唐の都城へと継承されていったのである。

考古学の研究は、ともすれば文化史上の議論に終始しがちである。しかし、鮮卑の漢化とよばれる現象を、単なる文化史上の出来事としてとらえたのでは、本質を見失うことになりかねない。五胡十六国の時代、胡族が華北を席捲し、武力によって漢人を圧倒した。しかし、中国の王朝として永続的な統治をおこなうためには、胡族の君主といえども、中国文化を受容し、それを正しく継承する必要があった。北魏は胡族が統治する王朝であるがゆえに、胡漢に君臨するためのさまざまな装置を生みださねばならなかった。

このことは、北魏が造営した都城や陵墓にも如実に反映されている。その特徴は、中国の古典文献の解釈にもとづいて生みだされたものであり、南朝文化のひきうつしではなかった。それは、皇帝を中心とする中央集権的身分秩序を実現する過程で形成されていき、いわば中国の伝統的な礼制を視覚的に実現することにより、王朝の支配をより説得力のあるものに高めようとしたのだろう。以上が、北魏の都城と陵墓の分析から導きだした本研究の結論である。

魏晋南北朝の都城や陵墓に対する従来の考古学的研究は、都城の構造はどのように復元できるのか、墓の構造や副葬品は時代と地域によってどのように異なるのか、といった問題ばかりを議論してきた。対象とする時代が新しくなり、文献史料が増加するにしたがって、考古学の議論の幅はどんどん狭まっているように思える。そうした状況を打破するためのひとつのケーススタディとして、鮮卑の漢化という現象をとりあげ、考古学と文献史学との対話を試みた。

上述のように、鮮卑の漢化をあつかった考古学の先行研究は、これを文化史上の問題としてあつかっており、中国史のなかにいかに位置づけるかという意識が希薄であった。そういう意味で、本研究は、先例のない新しい研究であり、その成果は文献史学など他の分野とも共有しうるものであると考える。

また、都城や陵墓の個別の分析についても、従来の考古学的研究にくらべてはるかに多角的な分析をおこなっており、魏晋南北朝考古学の研究水準を大きく引きあげる研究成果であると考えている。さらに、魏晋南北朝時代の墓制については、朝鮮半島の三国時代や日本の古墳時代とのかかわりから、日本や韓国の考古学研究にとっても注視すべき研究成果になることが予想される。

5．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計７件）

① 向井佑介、「北魏平城時代の仏教寺院と塑像」、『佛教藝術』、査読有、316 号、47-73 頁、2011 年
② 向井佑介、「東アジアの文字瓦」、『文化遺産学研究』、査読無、No.4、19-29 頁、2011 年
http://homepage.kokushikan.ac.jp/kch/study/study.htm
③ 向井佑介、「魏の洛陽城建設と文字瓦」、『待兼山考古学論集Ⅱ』、査読無、57-76 頁、2010 年
④ 向井佑介、「北魏平城時代における墓制の変容」、『東方学報』、査読有、第 85 冊、133-177 頁、2010 年
http://hdl.handle.net/2433/131787
⑤ 向井佑介、「北魏の考古資料と鮮卑の漢化」、『東洋史研究』、査読有、第 68 巻第３号、128-140 頁、2009 年
⑥ 向井佑介、「天沼俊一コレクションの中国・朝鮮古瓦」、『京都大学所蔵古瓦図録Ⅲ』、査読無、7-12 頁、2009 年
⑦ 向井佑介（姚義田訳）、「朝陽北塔考一従仏塔和墓制看遼代的地域（中国語）」、『遼寧省博物館刊』、査読無、第３輯、169-185 頁、2008 年

〔学会発表〕（計１件）
① 向井佑介、「東アジアの文字瓦」、シンポジウム 古代における東西の銭と文字瓦、2010 年 12 月 18 日、国士舘大学・世田谷キャンパス（東京都）

〔図書〕（計１件）
① 岡村秀典・下垣仁志・向井佑介編、『シルクロード発掘 70 年―雲岡石窟からガンダーラまで―』、臨川書店、103 頁、2008 年

6．研究組織
(1)研究代表者
向井　佑介（MUKAI YUSUKE）
京都大学・人文科学研究所・助教
研究者番号：５０４５２２９８